

この街で出会い、共に生きる

SPECIAL EDITION 特集 国際交流

外国人支援ボランティアと子どもたちの学習支援 ～地域で進む多文化化のために～

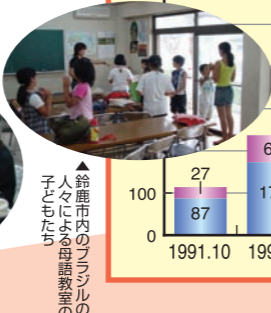


伊賀地区の外国人児童生徒
高校進学ガイダンス

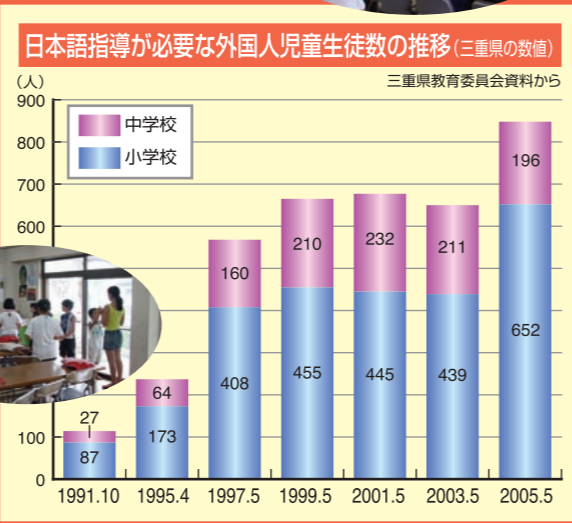
三重大学文学部・講師
藤本 久司 Fujimoto, Hisashi
[URL] <http://www.human.mie-u.ac.jp/~fujimoto/>



外国から来た中学生学習サポート「ジョイア」での様子



▲鈴鹿市内のブラジルの子どもたち



●外国人住民支援ボランティアの広がり

1993年、私は伊賀地方で約30名のメンバーとともに、日本語を学ぶ外国人を支援するボランティア教室を立ち上げ、グループ代表として11年間関わりました。活動は毎週2回夜。教えるボランティアも様々な職業の人、教えられる外国人も働いている人とその家族でした。活動は日本語学習だけでなく、生活相談、学習支援などにも広がりました。

90年代、こうしたボランティアグループが全国各地で生まれ、行政、日本人住民と外国人住民の対話・交流の仲介者として重要な役割を果たしてきました。1997年には三重県内の15のボランティア教室によって「みえにほんごネットワーク」(代表:藤本)が結成され、団体間の有意義な情報交換や交流の場となっています。

●「国境を越えた子どもたち」

2005年秋、三重大学学生と教員有志など十数名が集まり、外国から来た中学生の学習・進学支援のボランティア活動を始めました。週1回夕方、津市内の中学生10名余りが参加しています。

幼少時や小中学生時、国や家族の事情によって母国を離れ、日本に来る多数の子どもたちがいます。子どもたちは言葉や習慣の違う日本で様々な障壁やストレスを乗り越え、誤解や偏見と闘いながら、日本語を覚え学習に励んでいます。社会全体の受入れシステムが不十分中でもそれぞれが自分の未来を切り開こうとしています。**子どもは世界のどの国にいても義務教育を受ける権利があり、国はその権利に応える責任があります。**多文化の時代に即した対応と変革が求められているのです。

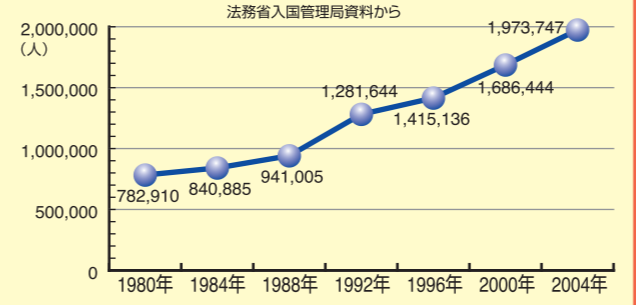
●「多文化が共演する時代」

海外にルーツを持ち日本で成長した(または、生まれた)子どもたちの多くは、将来の日本社会の貴重な構成員となっていくでしょう。現在、全国で多くのボランティア・NPOが、外国人住民やその子どもたちを対象に様々な形態の活動を続けていることは心強いことです。共生のため積極的な施策を進める自治体も徐々に増えています。ルーツの異なる人々とともに作り上げる多文化社会が来ようとしています。**“異文化を客席から眺める時代”は過ぎ、“多文化が共演する時代”を迎えつつあるのです。**



ペルーの民族音楽グループ「ワウヘミカンキ」(三重大学学生と伊賀の外国人青年交流会にて2004年12月)

日本の外国人登録者数の推移 (各年末現在)



●多文化共生

～文化背景の異なる人々が国内各地で、同じ地域の住民として共に生活しています～
日本の外国人登録者数は、1990年の出入国管理法改定を契機として増加のペースを増し、現在、約200万人(日本の全人口の約1.6%)となっています。

三重県の外国人登録者数 (国籍別)

